

文学の葉

第30号

Kitakyushu Literature Museum News

2021年10月1日発行

言葉への信頼

館長 今川 英子

・自粛と閉塞感の中での毎日。もつと視線を上げて、視野を広めて、背筋を伸ばさなくてはと反省！今、星野さんなら何を伝えてくれるでしょうか？

・展覧会を知り、慌てて『旅する木』を読んだから来館。これまで自分の考え続けてきたことを、「信じて貫いていい」と背中を押してくれるような写真と文章に救われました。うれしいのは最近、会話が減ってきた息子（高三）が「来てよかった」としみり言ってくれたことです。

・「なるべく早い時期に人間の一生がいかにかに短いものかを感じとって欲しい。好きなことに出会ったらそれを大切にしていって欲しい」この展覧会が何かのきっかけになると信じます。

「星野道夫展―悠久の時を旅する」に寄せられた感想の一部です。コロナ禍のために、温めていた企画やイベントを諦めなくてはならなくなり、文学館として何をどう伝えることが出来るのか、動画配信だったりSNSの活用だったり模索が続いていますが、このような感想に出会うと、「やってよかった！」と励まされ、「言葉の力は素晴らしい！」と再確認します。

昨今、言葉への信頼が著しく落ちてきたことが気になります。没後四〇年を経た向田邦子は、「手袋をさがす」というエッセイの中でこんなことを語っています。「清貧」ということが嫌いな「謙虚」ということは好きになれない。前者は「やせがまん」、後者については、「おごりと偽善に見えてならない」。「へりくだりながら、どこ

かで認めてもらいたいという感じをチラチラさせ、私は人間が出来ているでしょう、というヘンに行き届いたものを匂わせられると、もうそれだけで嫌気がさす。言葉は、文脈での使われ方や発し手によってはいかようにも受け取られます。言葉は言葉であるという認識は徐々に希薄になっていくようです。

九・一から二〇年、三・一一から一〇年、そしてコロナウイルスによるパンデミック。その間、大雨による川の氾濫や土砂災害など次々と〈想定外〉のことが襲いかかっています。このような困難な状況に向き合いながら、ややもすると挑発的な言葉に乗せられ一方的に流されかねない不安に抗して、精神の自立とも言うのでしょうか、自分で考え自分で判断しなければならぬことを強く意識します。そんな時に思い浮かぶのが茨木のり子の詩、「寄りかからず」です。

もはや／できあいの思想には寄りかかりたくない
もはや／できあいの宗教には寄りかかりたくない
もはや／できあいの学問には寄りかかりたくない
もはや／いかなる権威にも寄りかかりたくはない
こうきつぱりと言ひ切れるためには、よほど自分の内面を鍛え、自己省察を重ねるしかありません。その手がかりはやはり本を読むことではないように思うのです。

言葉をぎりぎりまで削ぎ落とし彫琢を極めた表現が詩です。言葉への信頼を取り戻したくて詩集をひもとくことが多くなりました。

この秋は、「詩の水脈―北九州 詩の一〇〇年」を開催します。この街での詩活動を体系化する試みです。どうぞご期待ください。

目次

● 巻頭コラム「言葉への信頼」	1
● 第29回特別企画展「星野道夫写真展―悠久の時を旅する―」	2～3
● 町田そのこさん北九州市文化大使嘱式・対談	4～5
● コロナ禍の中、文学館からの発信！	
● 第43回光草書道展「北欧の神話と童話」	
● 追悼 那須正幹先生	6
● 寄贈資料紹介・森崎和江旧蔵資料	

● 「書と文藝」展	7
● 友の会に新しい風	
● LED 照明を寄贈いただきました	
● 「二平方メートルの世界で」が絵本に！	
● 展覧会予告	8
● 第30回特別企画展「詩の水脈―北九州 詩の100年―」	
● お祝い、お悔やみ	
● 寄贈者・提供者、提供雑誌	



星野道夫
写真展

Hoshino Michio
The Eternal Journey

悠久ゆうきゅうの時を
旅する



2021
7.17^{SAT} ~ 9.20^{MON}

開館時間 9:30～18:00(入館は17:30まで)
 休館日 月曜日(ただし8月9日・9月20日は開館、翌日休館)
 観覧料 一般 500円(400円) 中高生 200円(160円) 小学生 100円(80円) ※子ども文化パスポートの適用あり
 ※1歳以下小児の入館は無料、2歳以下小児は、身体障害者手帳を提示し、無料観覧券を授与されます。また、身体障害者手帳を提示し、かつ75歳以上の高齢者(身体障害者の方の付添い人、年4人以上)は無料観覧券を授与されます。

| 主催 | 北九州市立文学館
 | 後援 | 朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、西日本新聞社、NHK北九州放送局、
 RKB毎日放送、九州朝日放送、TNCテレビ西日本、FBS福岡放送、テレQ、CROSS FM
 | 協力 | 豊野道末美術館 | 企画協力 | クレヴィス

北九州市立文学館
Kitakyushu Literature Museum

第二九回特別企画展は、「星野道夫写真展―悠久の時を旅する」を開催しました。星野さんは、極北の大地に魅せられ、アラスカに生きる人々や野生動物、自然を、写真と言葉で記録しました。展覧会では写真一〇〇点のほか、手紙、原稿、撮影日誌などの自筆資料を展示し、「自然と人との関わり」を追い続けた星野さんの軌跡を、さまざまな「出会い」から始まる「旅」をキーワードに辿りました。

〈展示構成〉

○プロローグ…一九七三年、シシユマ
レフヘーアラスカとの出会い

学生時代に出会った写真集『Alaska』、シシュマレフ村の村長宛ての手紙と返信の手紙、村での生活を記録したアルバムなどの資料を写真とともに紹介しました。

○第一章..生命の不思議―極北の動物たちとの出会い

アラスカ大学に入学し、自然写真家としての道を歩み始めたころの写真と初出雑誌（「アニマ」、「ナショナルジオグラフィック」など）、巡回展初公開の原稿「カメラを盗んだオオカミ」などを展示しました。

○第二章…アラスカに生きる―人々との出会い

星野さんが出会い、エッセイにも登場するアラスカ先住民の人々と狩猟生活の様子、アラスカを愛する人々などの写真を、文章とともに紹介しました。

○第三章..季節の色―自然との出会い

広大なアラスカ原野、カリブーの群れ、可憐な花など極北の季節の動く瞬間を捉えた色鮮やかな写真を、印象的な言葉とともに紹介しました。

○第四章..森の声を聴く―神話との出会い

クイーンシャーロット島（現ハイダ・グワイ）の朽ち果てたトーテムポールとの出会いから始まったワタリガラスの神話を求める旅を紹介しました。

○第五章..新しい旅―自然と人との関わりを求めて

自然と密接に関わりながら生きてきたアラスカ先住民の古老たち、アラスカ狩猟民のルーツを求め赴いたシベリアへの旅の写真までを紹介。また、アラスカ大学時代の取材ノート、シベリアでの最後の撮影日誌など貴重な自筆資料を展示しました。

(展示資料点数Ⅱ約一二〇点)

アンケート

- ・「自然というも一つの実」を感じさせてくれる素晴らしい展示だった。
- （60代・小倉北区）
- ・原稿や自筆ノートから星野さんを感じられて感動した。

・人間も地球上で生きるとてもちつぽけな一部だと改めて気づかされた。優しく謙虚でいたい。

◆スライド&トーク

「悠久の時を旅する 星野道夫が見続けた風景をたどって」

二〇二二年七月三日



星野直子さん（星野道夫事務所代表）によるトークイベントを行いました。写真をスライドに映しながら、それぞれの写真にまつわるエピソードやエッセイを紹介いただきました。

星野道夫さんが撮影した多くの種類の野生動物のなかで、カリブーとグリズリー（ヒグマ）のフィルムの枚数が圧倒的に多いそうです。カリブーは、春と秋に千キロもの長い移動をする動物。群れが通るルートは気候条件で変わるため、星野さんは研究者の話を聞き、撮影場所を決める参考にしていました。それでも、広い平原にテントを張り一ヶ月待っていても、一度も群れに遭遇することなく撮影を終えなければならぬことが半分以上あり、賭けのような撮影だと話されていたそうです。また、ヒグマの存在はアラスカに興味を持つ以前から星野さんのなかにあり、「東京で通学の電車で揺られて

いるこの瞬間に、北海道でヒグマが倒木を乗り越えているかもしれない」と「もう一つの時間」について想像を巡らせるような青年だったと話されました。

北のカリブーとあわせ大きなテーマだったのが、南の森と氷河と鯨でした。長い時間をかけて氷河や深い森が形成され、鯨が戻って来る豊かな海があるという、悠久の時間の流れのなかで自然が繋がっていくことを星野さんは伝えようとしていたと話されました。その他、クジラ漁、カリブーやムースなどの狩猟に見られる、狩られるものに対する狩猟民の神聖な気持ちに強く心打たれた星野さんが「人と自然とのかかわり」について思索を深め書いたエッセイを朗読されました。

最後に直子さんは、「亡くなって五年が経った今も写真や文章を見ていただけているのは、多くの人の支えがあったからこそ」と感謝の気持ちを話され、星野さんがきつと今伝えたいであろう文章を朗読し、トークを締めくくりました。

アンケート

・すてきなスライドと優しい直子さんの声で、あたたい気持ちになりました。
（60代・門司区）
・コロナ禍の自粛生活のなか、アラスカの自然（の写真など）にふれたことで、心がすがすがしくなりました。
（70代・遠賀郡）

カメラを持つてまちに出よう！

二〇二二年七月一八日（一般の部）
八月一日（親子の部）

写真家の

四宮佑次さん（日本写真家協会会員）を講師に迎え、写真の撮影講座を開催しました。



始めに、写真の歴史や撮影のコツなどのお話がありました。その後、参加者は自由にまちを歩き、風景をしっかりと「見る」ことによって発見した対象物をカメラに収めました。まち歩きのと、写真を一枚ずつ講評いただきました。親子の部では、気持ちの動いたものに対してシャッターをきる、という四宮さんからのアドバイスで、子どもたちはカメラの楽しさを感じたようでした。

アンケート

・短時間で写真を撮ることを考えさせられた時間でした。
（30代・八幡東区）
・カメラは自分がいいと思ったものをとればいい、とわかりました。
（9歳・若松区）

朗読で味わう

星野道夫さんのエッセイ

（北九州市立文学館・友の会主催イベント）

二〇二二年七月二四日
※八月七日、二二日は中止

ブックネットワーク北九州（代表：仲紀子さん）の皆さんが、「アラスカからのメッセージ」、「カリブーの旅」など六作品を朗読しました。「ナヌークの贈りもの」の朗読では、ナヌーク（ホッキョクグマ）役で友の会会員が参加しました。背景には星野さんの写真が映し出され、参加者は心に響く文章と美しい写真の両方を堪能していました。



アンケート

・朗読の素敵な声が、より内容を深くしてくれました。
（60代・門司区）
・星野道夫さんの想いがよく伝わってきました。
（50代・小倉北区）

町田そのこさん北九州市文化大使委嘱式・対談

二〇二二年六月一三日

町田そのこさんが北九州市文化大使に就任され、委嘱式と記念対談が文学館で行われました。緊急事態宣言の延長を受け、一般参加は行わず、録画・配信しました（配信は七月末まで）。

町田さんは福岡県京都郡生まれ。二〇一七年『カメルーンの青い魚』で作家デビュー、二一年『52ヘルツのクジラたち』で本屋大賞を受賞されました。

『52ヘルツのクジラたち』『コンビニ兄弟』は北九州が舞台です。この二作品に触れた箇所を中心に、対談の抄録をご紹介します。聞き手は今川英子館長が務めました。

作家を志されるまでのお話をお伺いできますか。

小学生のころいじめに遭い、教室で



町田 作家

とても孤独だったのですが、氷室冴子さんの小説に救われていました。氷室さんの作品世界の女の子たちは芯があつてたくましく、いじめに近いようなことが起きたとしても必ず意味があり、最後には皆が納得し、誰も悲しませません。こんな作品を書ける氷室さんに憧れ、「私も作家になって、お会いしてお礼を言いたい」と思ったのが最初です。

中学・高校時代は授業中に小説を書いていました。高校時代は演劇部に頼まれて台本を書いたこともあったんですよ。ですが、専門学校以降は多忙になって手放してしまっていました。

専業主婦だった二八歳の時、氷室さんの計報に接し、後悔します。「人生を支えてくださったお礼を言う」という夢から離れていた自分への、強い嫌悪感に苛まれました。改めて作家を目指すのと、子どもを抱いていないほうの手でガラケーで携帯小説を書き、サイトに掲載することから始めました。人気はすぐには出ませんでした。が、勉強になりましたし、仲間もできました。なにより、自分の夢があることで、毎日が明るくなりました。

これまで、自分が手に取らなかった芥川賞・直木賞の受賞作品を読んでみ

たり、読者を惹きつける文章や展開を知りたいと、桜庭一樹さんの『私の男』を全文タイプしたこともあります。書き方の呼吸、構成や冒頭の大切さを学びましたね。

どの作品も冒頭から印象深いのはそのためですね。冒頭が伏線になっている作品にはしびれてしまいました。

私はプロットを立てる書き方はあまりしていないのです。最初に「なんだこれは」という一文を持つと話が転がります。もちろん描写を足したり削ったりということはありますが、自分の中の一本道を進んでいくような感じです。



北橋市長 町田そのこさん 今川館長

小説を書けるのが嬉しく、やりたいことをやらせていただいているという気持ちです。書きたいことが沢山あり、手が追いついていません。

『52ヘルツのクジラたち』で初めて長編に挑まれていますね。

「声が届かない世界一孤独なクジラ」のモチーフは、長編を書ける実力がつくまではと温めていたものです。「助けて」という「声なき声」に耳を傾けたいと、昔から関心を持っていた、児童虐待やLGBT、ヤングケアラーなどの問題を織り込みました。現実を扱うのですからファンタジーに留めたくはなく、法律もしっかり調査したうえで書きました。

私も本に支えられてきたので、読者のかたの「救われる思いがする」「周りに声掛けをしたい」といった反応は嬉しいですね。

『コンビニ兄弟』は門司港が舞台ですね。わくわくしながら拝読しました。

『コンビニ兄弟』は、「文庫で読める軽いものを」という依頼を受けて書きはじめました。舞台を門司港にしたのは、担当者さんの「身近な土地を描くのは楽しいですよ」というアドバイスで。専門学校の生ときは、学校が嫌になるたび行っていたんです。若い人にも手に取って欲しくて、キャラク

ターが立つような設定にしました。

町田さんの作品には、強い意志を持ち、自分で人生を切り開く女性を描かれます。同調圧力に負けず、こう生きたいと思わされます。

男性に依存せず自分の足で立ち、逆境に立ち向かう女性を書きたいという気持ちがあります。私自身も憧れます。「一歩踏み出してみよう」、「明日もがんばろう」と思ってもらえるような物語を書きたいですね。

いまは母と娘をテーマにした長編作品と、『コンビニ兄弟』の二作目を書いていきます。門司港のディープな場所も書いていきたいなと思っています。



『コンビニ兄弟』新潮文庫刊、
『52ヘルツのクジラたち』中央公論新社刊

「コロナ禍の中、文学館からの発信！」

おうちで文学館とYouTubeチャンネルの活用

北九州市立文学館では、コロナ禍の第一波の中、ステイホームが呼びかけられた時から、ホームページで「おうちで文学館」コーナーを設けています。

コロナ禍で生まれた「おうち時間」を有意義に過ごしていたこうと企画したもので、最初のコンテンツは、文学館にある直径七メートルのステンドグラスのぬりえでした。磯崎新設計事務所に協力いただき、設計図を基に原画を作成、公開したのが始まりです。

次に、現在入手しにくい北九州ゆかりの文学作品を復刊している「文学館文庫」から森鷗外など代表的な文学者の作品を公開し、シリーズ化しました。

その後、子どもノンフィクション文学賞や詩のコンクールで使用できる原稿用紙を公開し、作品応募を促す取り組みも行いました。

昨年から冬にかけ開催した「火野葦平展」では、コロナ禍で会場まで足を運べなかった方のために、学芸員が展示解説した動画を撮影、YouTubeで公開しました。撮影から編集までスタッフによる手作りで、本年五月から公開し、現在三部作、二〇分弱の映像を配信しています。

その後も、大型モニターによるイベント告知や街頭ビジョンの活用、星野道夫写真展の会場宣伝映像、文学

賞等の作品募集のPR動画を作成し、

YouTubeでも公開することで、コロナ禍で外出を控えていても繋がることのできるコンテンツとして、少しずつ定着しつつあります。

YouTubeは、定期的に更新していきますので、北九州市立文学館公式チャンネルへの登録をお待ちしています。



YouTube チャンネルも視聴が少しずつ増えています。



第43回光草書道展

「北欧の神話と童話」

二〇二二年五月一日〜九日

光草書道会（橋村雅榮会長）主催の書道展、今年は「北欧の神話と童話」と題して、北欧神話やアンデルセン童話の他、フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」や童話「ムーミン」などから一節を選び、書で表現しました。会場には、個性豊かな約四〇点の書作品が並び、来場者の皆さんを楽しませていました。

また会期中には英日出版翻訳家の富原まさ江さんの講演会「北欧の神話と童話」も開催されました。

追悼 那須正幹先生

二〇〇七年度の特別企画展「ズッコケ三人組ワールド展」開催をはじめ、「子どもノンフィクション文学賞」の創設及び選考委員として長年にわたり北九州市立文学館に、ご支援いただきました。那須正幹先生が、二〇二一年七月二二日にお亡くなりになりました。

那須先生は、ベストセラーとなった「ズッコケ三人組」シリーズで有名な児童作家で、日本児童文学者協会の理事長も務められました。また、三歳のときの広島での被爆体験をもとに執筆だけでなく講演活動でも平和の大切さを伝えてこられました。

今年三月に行われた第12回子どもノンフィクション文学賞表彰式に出席いただき、子どもたちの作品に温かい言葉をかけてくださった時の那須先生の笑顔が忘れられません。

これまでのお力添えに深く感謝申し上げます。



那須正幹先生

寄贈資料紹介 森崎和江旧蔵資料

福岡県ゆかりの詩人、作家の森崎和江さん旧蔵資料一式をご寄贈いただきました。

○寄贈者 松石泉さん

○寄贈点数 計一〇二九点

○受贈年月 二〇二一年五月

森崎さんは、一九二七年に植民地時代の朝鮮（現在の韓国・大邱）に生まれ、四四年、福岡県立女子専門学校（現・福岡女子大学）入学時から福岡で過ごします。戦後、詩人・丸山豊主宰の「母音」同人となり詩作を行い、五八年、中間市で谷川雁、上野英信らと「サークル村」を創刊。炭坑で働く女性からの聞き書きの連載、「無名通信」の刊行などを行います。のち、性とエロス、社会的弱者に焦点をあてた著作を発表しました。

この度ご寄贈いただいた原稿、取材ノート・手帳、取材資料、テレビ・ラジオ台本、VHSテープ・カセットテープ、書簡、遺愛品、書籍・雑誌などから二点をご紹介します。

❖「奈落の神々」取材ノート、原稿
ノート・A4版、九冊、ペン書き
原稿・二〇〇字詰めB5版原稿用紙、万年筆書き



『奈落の神々―炭坑労働精神史』（一九七四年、大和書房）は、閉山した筑豊を歩き、かつて炭坑で働いた古老年代からの聞き書きに加え、近世からの歴史資料、筑豊炭田の歴史などを紐解き、炭坑夫の精神史を浮かび上げようとして試みた著作。寄贈資料は、調査メモ、聞き書きメモなどを記した全九冊の自筆ノートと、一〇〇〇枚を超える自筆原稿。原稿は〈第一部 労働〉の七七八枚、〈第二部 創造〉の五三七枚、計一三一五枚。

森崎さんは「あとがき」で、「地下労働の場での精神のありようを集約しよう」と試みたが、なお、すくい取れないものがあつたことを次のように記しています。

けれども書き終えて、なお、しんと体の外側にひろがっている世界があるのである。とうてい追いつくことができぬその気配を、私は、心をむなしくして感じとっている。ほんとうに、実におそろしい精神世界が、そこに、ある。

（『奈落の神々』あとがきより）

❖山本作兵衛 炭坑記録画（彩色） 二枚（一九七三年、一九七四年）

森崎さんは、『奈落の神々』執筆のための聞き書きを行っていた当時、すでに『筑豊炭坑絵巻』を出版し、絵画をとおしてかつての炭坑の様子を記録し続けていた山本作兵衛（一八九二～一九八四）を度々訪ねました。寄贈の絵画は、『奈落の神々』刊行の報告で訪問した際、絵をもらうのを遠慮する森崎さんに、「森崎さんな、作兵衛の絵はもらわれんとすな」と贈られた、と随筆「筑豊と山本作兵衛さん」にある炭坑記録画二枚です。



坑内採炭の男と女が描かれる。
（一九七三年）© Yamamoto Family



ヤマの入浴の様子が描かれる。
（一九七四年）© Yamamoto Family

「書と文藝」展

二〇二二年八月二七日～九月二二日

現在、市

が開催して
いる「東ア
ジア文化

都市北九

州 2020 ▼

2021」の事

業の一つで

ある「書と

文藝」展が

北九州市立

美術館分館

で開かれま

した。



漢字文化圏である日本・中国・韓

国。とりわけ大陸に近い北九州との友

好が、豊富な作品・資料・人物などを

通じて紹介されました。

漢字の歴史や成り立ち、書体の変化、

そして日本語の成り立ちについて解説

されており、漢字から平仮名への変遷

がわかる書の作品は見ごたえがありま

した。

文字が結んだ日中韓の友好を今回の

共催都市である四市（北九州市、紹興

市、敦煌市、順天市）の書家の秀作

が、美術としての新たな可能性を探索

する「書」作品として、また書家に加

え書愛好家、小中学生を含む一般市民

が「和」の文字であらわした三か国合

作のパネルも展示されました。

北九州ゆかりのコーナーには、林芙

美子や火野葦平をはじめゆかりの現代

作家などの文章の一節が「書作品」と

して展示されました。さらに文学館

及び松本清張記念館所蔵の作家直筆の

資料も多数展示されました。

友の会に新しい風

北九州市立文学館友の会の新しい会
長に加賀美清之さんが、副会長に江口
恵子さんが就任されました。

これまでの文学館への支援はもとよ
り、これまで以上に会員同士の顔が見
える交流に重点を置きたいと、今回、
ボランティアで支える活動を取り入れ
ました。

星野道夫写真展では、グッズ販売と
朗読会を友の会自主企画として計画
し、混雑時の売店のサポートや、朗読
会の受付・進行をすべて会員が担い、
シロクマ役として朗読にも挑戦しまし
た。活動時には、お揃いのデニムのエ
プロンをユニフォームとして着用し、
照れながらも笑顔で活動している会員
の皆さんが印象的でした。

次回以降の活動者も決まっています
が、福岡コロナ特別警報や緊急事態
宣言が発出されたため、残り二回の朗
読会は開催中止になりました。続けて
参加予定だった会員からの「知り合い
もでき、楽しくなってきたのに残念」

との声に、この活動は会員同士の交流
のきっかけになっており、新しい風の
流れが感じられました。

文学館としても、皆さんに満足して
いただける魅力ある事業を続けていき
ますので、友の会活動に興味のある方
は、ぜひ、友の会に参加いただき、文
学館とともに活動をしてみませんか。

LED照明を寄贈いただきました

二〇二二年七月

文学館の特別企画展示室の照明が、
展示資料にやさしく省エネのLED照
明になりました。文学館友の会の会員
からの寄贈によるものです。ありがと
うございます。

天井もすっきりして、明るくなった
特別企画展示室でのこれからの企画展
をぜひお楽しみください。

「二平方メートルの世界で」 が絵本に！

第11回子どもノンフィクション文学
賞（小学生の部）で大賞を受賞した前
田海音さんの作品「二平方メートルの
世界で」が、今年四月に小学館から絵
本として出版されました。絵は、はた
こうしろうさんと、作品に合うやさし
いタッチの絵本となっています。

この作品は、受賞後に、「子どもノ
ンフィクション文学賞の作品が読みた

い」と全国各地から問い合わせがあり
ました。絵本として出版されてから
は、テレビでも取り上げられていま
す。

ますます注目を浴びていく作品に、
文学館職員一同、とても嬉しく思っ
ています。



〈予告〉

文学と書の融合

—筆に思いをたくして—

雲心書作展

会期：令和3年10月12日（火）～17日（日）
会場：北九州市立文学館 企画展示室

展覧会予告

第30回特別企画展「詩の水脈——北九州 詩の一〇〇年——」

令和3年10月23日(土)～令和4年1月30日(日) 主催：北九州市立文学館

近代以前、詩とは漢詩のことでした。

明治以降、西洋文化の影響を受けて「近代文学」が生まれ、新しい「詩」が生まれました。それは変容、発展を続け、今日の「詩」へと続いてきました。

北九州では大正年間においてその黎明を見ることが出来ます。以降、多くの同人詩誌が創刊され、詩人を輩出してきました。本展では北九州地域における一〇〇年を越える詩の歴史を、それを担った詩人たちとその作品とともに辿り、また現代の詩人、詩誌も取り上げ、詩の未来へとつながる活動を紹介します。

関連イベント

開会記念講話「詩の現在と日本語の水脈」

・講師 岡田哲也さん(詩人)

《日時》10月23日(土) 11:00～12:00

文学講座

・「詩誌『鵬』の位置づけについて」

・講師 大川内夏樹さん

《日時》10月24日(日) 13:30～15:00

・「炎える母」以前の詩人宗左近

・講師 加藤邦彦さん(佛教大学教授)

《日時》11月14日(日) 13:30～15:00

※宗左近・花の会主催事業

北九州同人詩誌のアンソロジーを読む

《日時》11月23日(火・祝)

13:30～15:00

※福岡県詩人会主催事業

リーディング公演「詩×演劇『炎える母』

《日時》11月27日(土) 14:00

※(公財)北九州市芸術文化振興財団

主催事業

講演会

・「今、詩と向きあうこと」

・講師 高橋睦郎さん(詩人)

《日時》12月4日(土) 13:30～15:00

・「本は葉書／葉書は本」詩の新しい探究

・講師 平出隆さん(詩人)

《日時》12月12日(日) 13:30～15:00

・「今までになく詩に向き合っています」

・講師 伊藤比呂美さん(詩人)

《日時》12月18日(土) 13:30～15:00

お祝い

・町田そのこさん(作家)が、『52ヘルツのクジラたち』で二〇二一年本屋大賞を受賞。

・角田光代さん(作家)が、第一回古典の日文化基金賞(文学・思想分野)を受賞。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・那須正幹さん(作家)
二〇二一年七月二二日にご逝去、79歳。
心よりお悔やみを申し上げます。

寄贈者・提供者

青野長幸、青森県近代文学館、赤磐市教育委員会、阿木津英、麻生壽々代、荒木輝二、有森信二、一条真也、いわさき市教育文化事業団、内田紀久子、江戸東京博物館、仰木奈那子、大阪俳句史研究会、岡田功、岡田哲也、神奈川近代文学館、北九州市立大学、紀の崎茜、木下昭次郎、清原雅彦、黒瀬圭子、群馬県立土屋文明記念文学館、劇団青春座、講談社、向野利彦、国文学研究資料館、国民みらい出版、坂本宮尾、佐々木央、燦葉出版社、塩田勢津子、四宮佑次、勝央美術文学館、司馬遼太郎記念館、新葉館出版、新宿区立漱石山房記念館、鈴木城頭土、砂子屋書房、船団の会、鷹取美保子、高山市文化協会、田島三間、短歌研究社、調布市武者小路実篤記念館、東京四季出版、徳島県立文学書道館、長塚節研究会、中原中也記念館、日本近代文学館、能村

研三、林美美子の会、平出隆、福岡県歌人会、古谷龍太郎、文京区立森鷗外記念館、濱田源一郎、北海道立文学館、前橋文学館、又吉榮喜、松石泉、松本清張記念館、三上於菟吉顕彰会、森鷗外記念館(津和野町)、行橋市教育委員会、吉村昭記念文学館、若松区役所総務企画課、和田安弘

提供雑誌

藍、青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、あん、いのちの籠、浮雲、沖、海峡派、GAGA、北九州国文、九州作家、九州文学、九大日文、鯨々、玄海、詩と思想、自鳴鐘、水脈、scripta、星火方正、青穂、川柳くろがね、川柳マガジン、空、タルタ、小さい旗、天籟通信、新壱、虹野、浜木綿、ふだんぎ、ふよう、ぼち袋、むらさき、八雁、遼、りんどう

訂正とお詫び

館報第29号にて、玉井史太郎さんの逝去日を六日としましたが、五日の誤りでした。謹んでお詫び申し上げます。

2021年10月1日発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

■開館時間

9:30～18:00(入館は17:30まで)

■休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始